



## 中村不折のパリ留学時代 : 《龍眠帖》への一道程

南出, みゆき

---

**(Citation)**

美学芸術学論集, 4:101-102

**(Issue Date)**

2008-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCOI)**

<https://doi.org/10.24546/81002339>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002339>



## 【修士論文要旨】

## 中村不折のパリ留学時代——《龍眠帖》への一道程——

南出 みゆき

日本近代の洋画家中村不折（1866-1943）は、洋画以外にも新聞挿絵画家、論客、書家、書道資料収集家としても活躍した。また文学界との交流もあり、森鷗外は墓石の銘に不折の書を望み、夏目漱石は『我輩は猫である』の装丁を任せている。特に正岡子規との関係は深く、子規が没するまで互いの制作に影響を及ぼし合った。

不折は1901年から1905年にかけてパリで絵画を学んだ。洋画が本業で書は娯楽だとする不折本人の意識とは裏腹に、帰国後とみに書の活動を絵画のそれに比肩するほど活発なものにしていく。そして1908年に発表した書道作品《龍眠帖》により、書家としての不折と彼の六朝風の書体とは広く一般にまで知られることとなる。

不折の書家としての活動はこれまで、1895年の日清戦争従軍に際し、中国及び朝鮮の風物、文物を彼が見聞き書道資料を入手したことに、その礎があるとされてきた。それに比べ留学時代は、帰国後彼が書の活動を盛んにしたにもかかわらず、絵画の側からの研究が主であった。

それを受け本論では、彼のパリ留学時代を単に絵画的な活動だけには収まらない、書をはじめとする様々な要素が溶け合っている時期として捉え直した。パリで不折にはどのような技術的変化、意識的変化が起ったのだろうか。洋画家から書道家へとその主要な活動領域を移行させていく、彼の後の活動を予感させる要素を見出すべく、本論では次のような方法をとった。

第1章では、画家の書である《龍眠帖》の発表に至るまでの経緯とその大きな反響について概観した。第2章では、不折が渡欧して得たものを探るため、彼がパリで多くの時間を費やした美術学校アカデミー・ジュリアンを中心に学んだことを扱った。第3章では、当時パリで他の日本人たちと交遊した「パンテオン会」を中心に、不折が考え試作したやや個人的な活動を扱う。第4章では、留学を糧に展開した不折の持論とその反響を纏め、不折にとっての留学の意味を考察する。

その結果次のような結論を得た。アカデミー・ジュリアンのジャン＝ポール・ローランスのもとで、不折は人体素描の訓練を行い、日本にはまだ、対象を線によって正確且つ迅速にとらえる十分な写生技術がないことを知る。そのためモデルを前にせずとも複雑な構図の作品を制作できる段階に至っていない日本美術界に、あらゆる物の表現の基礎を与える裸体画を不折は導入し、洋画の基礎訓練に役立てようとした。そして概念や史実を表現する理想画や歴史画によって、その時代を生きる日本人ならではの表現を不折は模索していく。

また書に関しては、線を重視したデッサンの鍛錬と並行して書を独習したことで、不折は書の見方を変化させている。『パンテオン会雑誌』に載せた講和「書のはなし」には、一本の

字面を「線として見ること」から「形として見ること」への視点の変換がみられる。字面を線と見るか形と見るかは、ちょうど図と地の関係のように、一つの視線の表裏を成している。そのため慣れ親しんだ線的な見方を、もう一つの見方に換えるには転機が必要であった。この転機を与えたのが、不折にとっては日本書道界よりも更に古い時代の六朝の書であった。彼が形によって書体を玩味する審美眼を得たのは、パリでの絵画と書の活動の接近があり、線で形を把握するデッサンを学んだ目で書を観察し続けたからである。

だがこのように洋画と書において新たな課題を発見した不折を、帰国後待ち受けていたのは、様々な価値観による絵画表現の共存を許容するフランスとは全く性質を異にする、ほぼ印象派から後期印象派へと一本の流れができつつあった、閉塞的な日本美術界であった。不折がアカデミックな技法を学んできたこともあり、彼の構想は単なる時代遅れの方法論だとみなされた。さらに子規のような理解者にも恵まれず、不折が訴える裸体画を基礎とした写生技術の重要性やリアルさの追求も十分に理解されることがなかった。

それとは対照的に不折の書の活動は、《龍眠帖》によって、日本の書道界に前衛的な異分子として登場することになる。画業で十分に果たされなかった方法は、画業と比肩するまでになっていく不折の書の仕事へと開花する。ヨーロッパとの接触により、諸学問の知識を得ることの大切さを知るとともに、不折は自分の芸術活動に日本人としての表現がなくてはならないとより一層意識するようになった。その傾倒を十分に引き受けたのが彼の書における活動であった。不折はパリを中心とした留学生活によって、従来の中国の影響から脱した、その時代を生きた一日本人として個性を表現するための書を発見したのである。

(※本稿は2008年1月16日に提出した修士論文の内容を要約したものである。)

(みなみでみゆき：神戸大学人文学研究科博士課程前期課程)